

松江市文化財調査報告書第49集



文化財愛護
シンボルマーク

向荒神古墳発掘調査報告書

1992年3月

松江市教育委員会



S K - 0 1 出土秋草双鸟鏡

例　　言

1. 本書は、平成2年度において松江市教育委員会が実施した向荒神古墳発掘調査にかかる報告書である。
2. 本調査は、松江市教育委員会が有限会社豊和不動産の委託を受けて実施したものである。
3. 調査の組織は下記のとおりである。

委託者	有限会社豊和不動産	代表取締役	木村 勝吉
受託者	松江市代表者	松江市長	石倉 孝昭
主体者	松江市教育委員会	教育長	諫訪 秀富
		教育次長	北村 悅男
		社会教育課長	杉原 精訓
		文化財係長	岡崎雄二郎
調査担当者及び調査員		同 主事	飯塚 康行
			中尾 秀信
		同 畏託員	稻田 瑞

4. 調査の実施にあたっては、次の方々の指導と協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

調査指導　三浦 清氏（島根大学教育学部教授）、前田 洋子氏（大阪市立博物館学芸員）

調査協力　落部 直正（有限会社豊和不動産）、狩野 忠志（同）、小谷 浩和（同）

5. 出土遺物はすべて松江市教育委員会で保管している。

6. 本書の編集及び執筆、図面の作成等は飯塚、中尾がこれを行った。

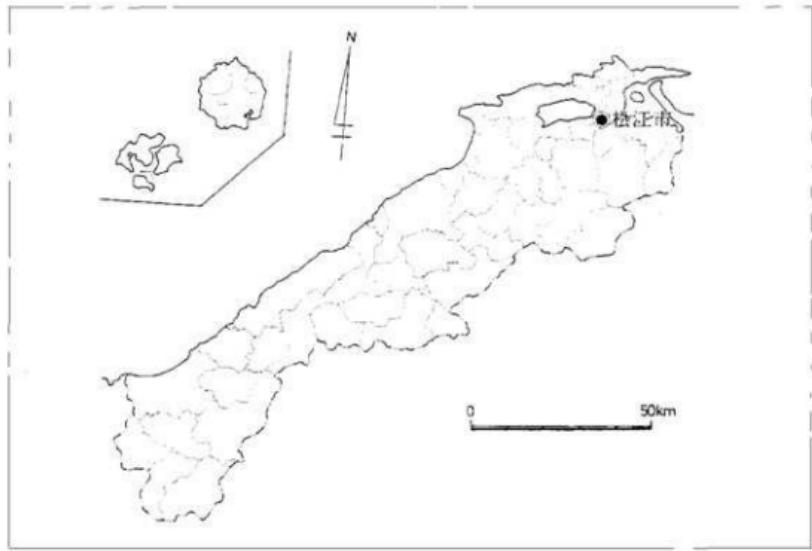
文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会（現文化庁）が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である柱^{半柱}、すなわち^{半柱}と^柱の組み合わせによって全体で軒を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していくこうというものです。



文化財愛護
シンボルマーク



(島根県地図)



(松江市地図)

目 次

1. 調査に至る経緯	4
2. 周辺の歴史的環境	4
3. 調査の概要	
(1) 昭和55年度の調査	10
ア. 遺構について	10
イ. 出土遺物について	13
(2) 平成2年度の調査	15
ア. 墳丘について	15
イ. 周濠について	15
ウ. 主体部について	16
エ. 出土遺物について	23
4. 出土遺物の検討	
(1) 古錢について	27
(2) 和鏡について	29
5. 小 結	30

1. 調査に至る経緯

向荒神古墳は松江市上乃木町2,141-1番地に所在する古墳である。從昔から一辺18mの方墳として知られ、「荒神さん」として地元の人々に祀られてきた。

本墳は、乃木二子塚古墳、二子塚古墳、長砂古墳群が存在する丘陵の北方低丘陵上の尾根筋をわずかにはずした山寄せの形態で立地する。墳頂部の標高は18.4mを測る。本墳西側には未舗装の幅2mほどの市道当貫野田線が通っており、墳丘北西角部分はこの道路によって削平されている。墳丘および東側斜面は竹林で覆われており、墳頂部にはさしわたし5m×7mほどの平坦面を有する。

昭和55年度において、市道当貫野田線拡張工事の際に松江市教育委員会によって、昭和55年9月16日から昭和56年2月2日までの計27日間、路線計画区域内の発掘調査が実施された。その結果、古墳とともに周濠が発見され、墳丘本体は一辺15mの方墳であることが確認された。またこの調査に際して周濠中から古墳時代後期の須恵器壺片、奈良時代後期の須恵器环身、平安時代の平底の壺が出土したが、この古墳の築造年代を断定することはできなかった。

その後平成2年度において有限会社豊和不動産が住宅団地の造成を計画した際、この古墳が開発区域内に含まれたいたため、松江市教育委員会では工事に先立って発掘調査を実施することとなった。調査期間は平成3年1月16日から平成3年3月23日までの計35日間である。

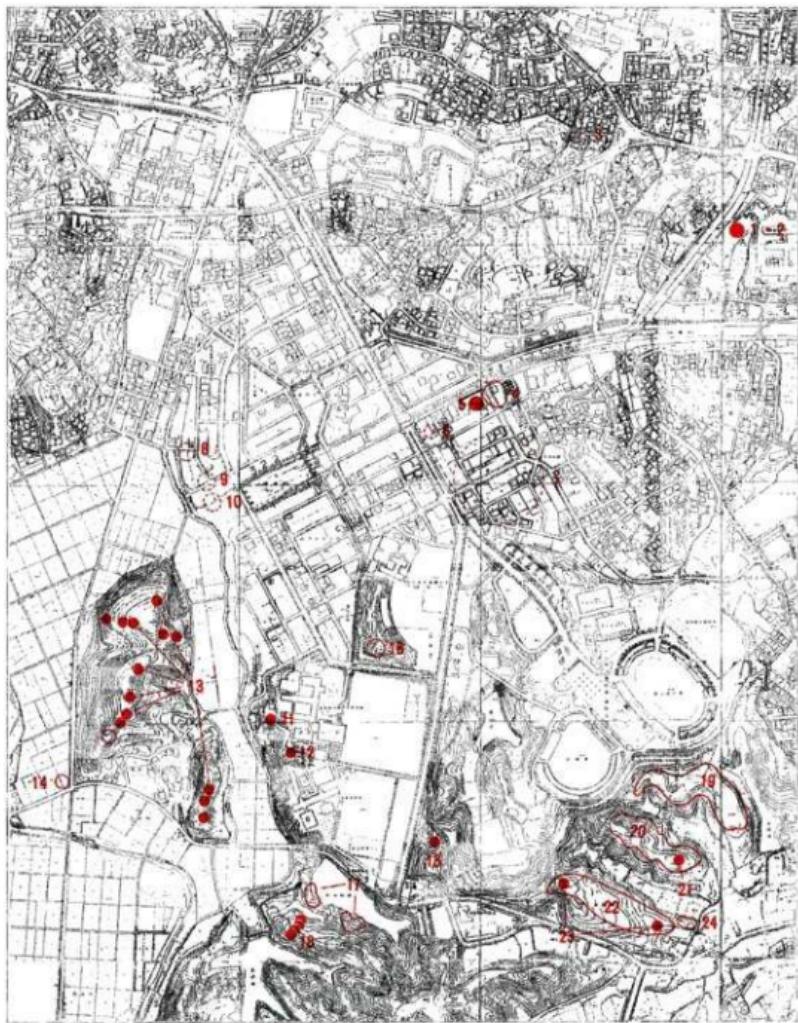
2. 周辺の歴史的環境

1. 向荒神古墳

発掘調査の前段階では、一辺18mの方墳と考えられていた。墳頂には「たび」の古木があって荒神さんが祀られている。

2. 野田遺跡

向荒神古墳西側に隣接した野田地区で、地表面に須恵器・土師器片の散布する地域であつ



第3図 周辺の遺跡分布図

- 1. 向堀神古墳
- 2. 野田遺跡
- 3. 綾塚古墳
- 4. 下沢遺跡
- 5. 乃木二子塚古墳
- 6. 二子塚古墳
- 7. 長砂古墳群
- 8. 向原古墳群
- 9. 友田遺跡
- 10. 南友田遺跡
- 11. 後友田遺跡
- 12. 蓬松古墳推定地
- 13. 田和山古墳群
- 14. 菜園前遺跡
- 15. 運動公園内古墳群
- 16. 奥山遺跡
- 17. 大久保遺跡
- 18. 大久保古墳群
- 19. 神田遺跡
- 20. 洪ヶ谷古墳
- 21. 洪ヶ谷古墳
- 22. 勝負谷遺跡
- 23. 勝負谷古墳群
- 24. 深田遺跡

た。昭和55年度に向荒神古墳とともに調査を行ったが、後世の畠地の耕作により擾乱を受けており、遺構は発見されなかった。

3. 経塚古墳

すでに消滅しており、方墳であること以外不明。

4. 下沢遺跡

乃木二子塚古墳の墳丘東側直下の畠地一帯の散布地で、黒曜石製石鏃、スクレイバー石片や須恵器片、古式土師器片が出上しているが、明確な遺構は確認されていない。

5. 乃木二子塚古墳

南部より派生する低舌状丘陵の尖端を切削し、周濠を穿つとともに盛土を施して造った前方後方墳である。昭和56年度に松江市教育委員会によって墳丘周囲をトレントにより調査された。その結果、中軸長36m、前方部長14m、前方部高2.25m、後方部長22m、後方部高4mの規模を持つことが判明した。また墳丘くびれ部から高环形器台や、周濠中から須恵器片が検出された。いずれも6世紀前半を中心とした時期のものである。

6. 二子塚古墳

二子塚古墳は、乃木二子塚古墳の西方に隣接して築造された一辺約18m、盛土高2m以上の方墳である。松江市教育委員会によって昭和57年度に調査された。その結果、主体部は後世の擾乱により形態は不明であるが、わずかに短刀と鉄鏃の破片が残存していた。墳丘表土や周溝中からは須恵器片、円筒埴輪片が多数出土しており、その時期から山本編年のⅡ期からⅢ期の過渡期に築造された古墳であることが推定される。また、注目される点としては、墳丘基盤上から上師器の広口壺、壺が1個体ずつ並置して検出されたことで、古墳築造直前の地鎮祭のようなお祭りの際に供献されたものと考えられる。

7. 長砂古墳群

長砂古墳群は、乃木二子塚古墳のすぐ南側に派生する比較的平坦な丘陵に立地する。計17基の方墳が所在し、それは4群に分かれる。第1支群は4基からなる。第2支群は7基、第3支群は5基、第4支群は1基からなる。乃木土地区画整理事業のため、昭和55年度において発掘調査が実施された。その結果、いずれも一辺5~15m程度、高さ0.5~1.5mほ

どの小規模～中規模の方墳で、盛土の比較的高い位置に狭小でいびつな土壙を有する。主体部、埴裾、周溝中からの出土遺物はいずれも5c中～後にかけてのものであり、本古墳群は極めて短期間のうちに連続継続的に築造されたものであると考えられる。

8. 向原古墳群

向原古墳群は、長砂古墳群、乃木二子塚古墳、二子塚古墳が存在する丘陵から谷を隔てた西方にのびる舌状丘陵の北部に存在し、昭和57年度において松江市教育委員会によって調査された。その結果、一边6.0～8.85mの方墳2基と、直径2.0～9.0mの円墳2基からなる古墳群で、出土遺物からいずれも山本編年I期に築造されたものであることが考えられる。

9. 友田遺跡

向原古墳群の存在する丘陵南側で発見され、昭和56～57年度に松江市教育委員会によって調査された。その結果、弥生時代中期～後期の墳丘墓6基、25基からなる土壙墓群、四隅突出型方型墓1基が検出された。このうち中期の墳丘墓群と土壙墓群とは隣接しながらも明確に墓域を分けており、墳丘を持つ集団と持たない集団との階層分化が墓制に明確に現れている。しかし、弥生時代後期後半に築造されたと推定される四隅突出型方型墓については、土壙墓群を無視してその上に築造されており、土壙墓群断絶の後におそらく別の集団が築造したものと考えられる。

10. 南友田遺跡

友田遺跡の南側で発見された遺跡で、昭和57年度に松江市教育委員会によって調査された。その結果、弥生時代前期後半と、古墳時代終末期墳の土器が出土した。住居跡の存在した可能性が考えられるが、明確な遺構は検出されなかった。

11. 後友田古墳

友田遺跡の南方約1kmの地点にある古墳で、昭和56年度に松江市教育委員会によって調査された。その結果、出土遺物より山本編年I期に築造された円墳らしいことがわかったが、古墳西側半分は崩壊しており、更に墳頂部には四等水準点が設けられていたため、古墳の規模、主体部の詳細は不明であった。

12. 潜松古墳推定地

後友田古墳の南側に所在し、昭和56年度に松江市教育委員会によって調査された。その結果、古墳と判断する材料がなく、遺物も検出されなかったため、古墳でないものと判断された。

13. 田和山古墳群

長砂古墳群から西方の小さな独立丘陵上に存在する古墳群で、古墳12基、神社跡地1所、土墳墓群の可能性がある散布地1所がある。平成元年5月において民間の宅地造成が計画された際、この古墳群の文化財的価値を確認するため、平成2年度において松江市教育委員会によって丘陵中心部に存在する田和山1号墳の発掘調査が実施された。その結果、全長20m、後円部径12m、前方部長8m、高さ2mの前方後円墳であることがわかった。内部主体として後円部に北に開口した長さ2.4m、幅1.7mの横穴式石室をもつことがわかった。出土遺物は直刀2、短刀1、鏡具1、鐵鎌10、ガラス小玉7、坏蓋8、坏身4、提瓶2が検出された。これらの時期から6世紀後半に築造された古墳であることがわかった。またこの調査によって本墳を含む田和山古墳群は、古代の乃木地区の地域性と経済状態を知る上で重要な遺跡であることがわかったため、現状保存されることとなった。

14. 薬師前遺跡

詳細は不明であるが、須恵器、土師器とともに弥生土器が採集されている。

15. 運動公園内古墳群

運動公園造成の際に消滅しており、現在方墳数基を残すのみである。

16. 奥山遺跡

島根女子短期大学移転の際に発見された遺跡で、昭和62年度に島根県教育委員会によって調査された。その結果、東向き斜面の谷奥部で3穴の横穴墓が発見され、B-1号横穴からは鏡元に花形紋様の象嵌を施す全長114cmの太刀が検出された。出土遺物から7世紀初頭を中心とした横穴群であることが考えられる。

17. 大久保遺跡

大久保池南辺で土師器片等が採集された散布地である。

18. 大久保古墳群

大久保池と吉沢池との中間の丘陵上に存在する古墳である。前方後円墳1基、方墳3基が確認されている。

19. 神田遺跡

(仮称) 南新設中学校の建設が計画された際に、松江市教育委員会がトレンチによる試掘調査を実施した結果発見された遺跡である。調査の結果、ピット、上壙状遺構、溝状遺構が多数検出された。出土遺物としては5世紀後半～7世紀代の須恵器を中心とする土器類があり、また窓体状塊も検出されたことから、住居跡や窯跡などの生産遺跡の存在が推定される。

20. 渋ヶ谷遺跡

(仮称) 南新設中学校の建設が計画された際に、松江市教育委員会がトレンチによる試掘調査を実施した結果発見された遺跡である。調査の結果、住居跡状の落込みや溝状遺構、それに伴う須恵器、土師器が検出され、住居跡の存在が推定される。

21. 渋ヶ谷古墳

(仮称) 南新設中学校の建設が計画された際に、松江市教育委員会がトレンチによる試掘調査を実施した結果発見された遺跡である。調査の結果、一辺8m、高さ1mの方墳で、墳丘中心部に木棺直葬の土室部と思われるプランが検出された。

22. 勝負谷遺跡

(仮称) 南新設中学校の建設が計画された際に、松江市教育委員会がトレンチによる試掘調査を実施した結果発見された遺跡である。調査の結果、丘陵尾根筋と平行に岩盤を加工した溝状遺構が検出された。出土遺物は須恵器片であった。

23. 勝負谷古墳群

(仮称) 南新設中学校の建設が計画された際に、松江市教育委員会が分布調査を実施した結果、丘陵頂部付近に2ヶ所、先端部付近に1ヶ所山塚と思われる地形が発見された。

24. 深田遺跡

(仮称) 南新設中学校の建設が計画された際に、松江市教育委員会がトレンチによる試掘調査を実施した結果発見された遺跡である。窓状遺構とピット3穴が検出され、角釘や陶磁器片が検出された。

3. 調査の概要

(1) 昭和55年度の調査

昭和55年度の調査は、工事によって削平される部分について、地山面まで掘り下げ、古墳の周濠の有無、古墳の平面形、古墳に関係するとと思われる遺構・遺物の確認に主目的を置き、古墳本体については調査しなかった。

A. 遺構について

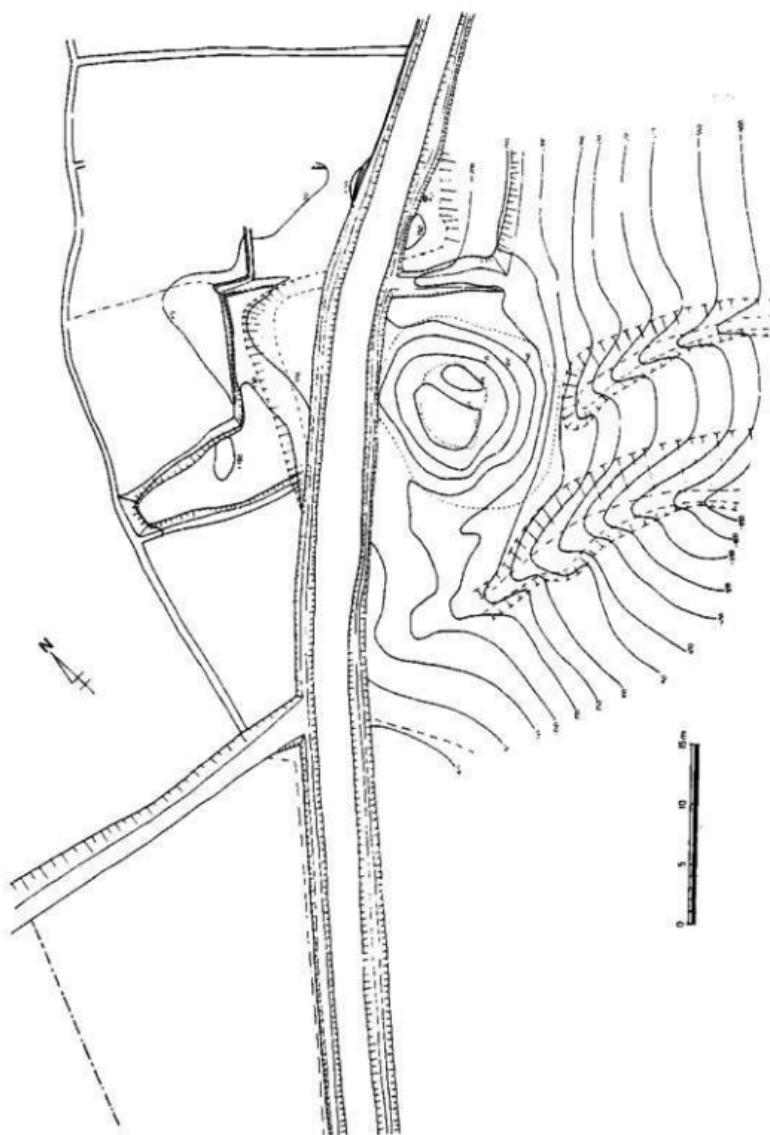
古墳の南側隣接地について、Aトレンチを設定し、調査したところ、深さ96cm、上端幅4.16m、下端幅86cmの濠が確認された。濠内の堆積土は一様に黒褐色土であった。

これは、南北方向に走り、しかも古墳の西側斜面に平行していることから、これが向荒神古墳の西側の周濠に相当するものと断定した。さらに周濠の屈折部を確認するため、Aトレンチの東側竹林内にBトレンチを、西側市道部分にCトレンチを設定した。Bトレンチではその東端付近で濠の上端の線が、ほぼ直角に折れ曲がっていることを確認した。

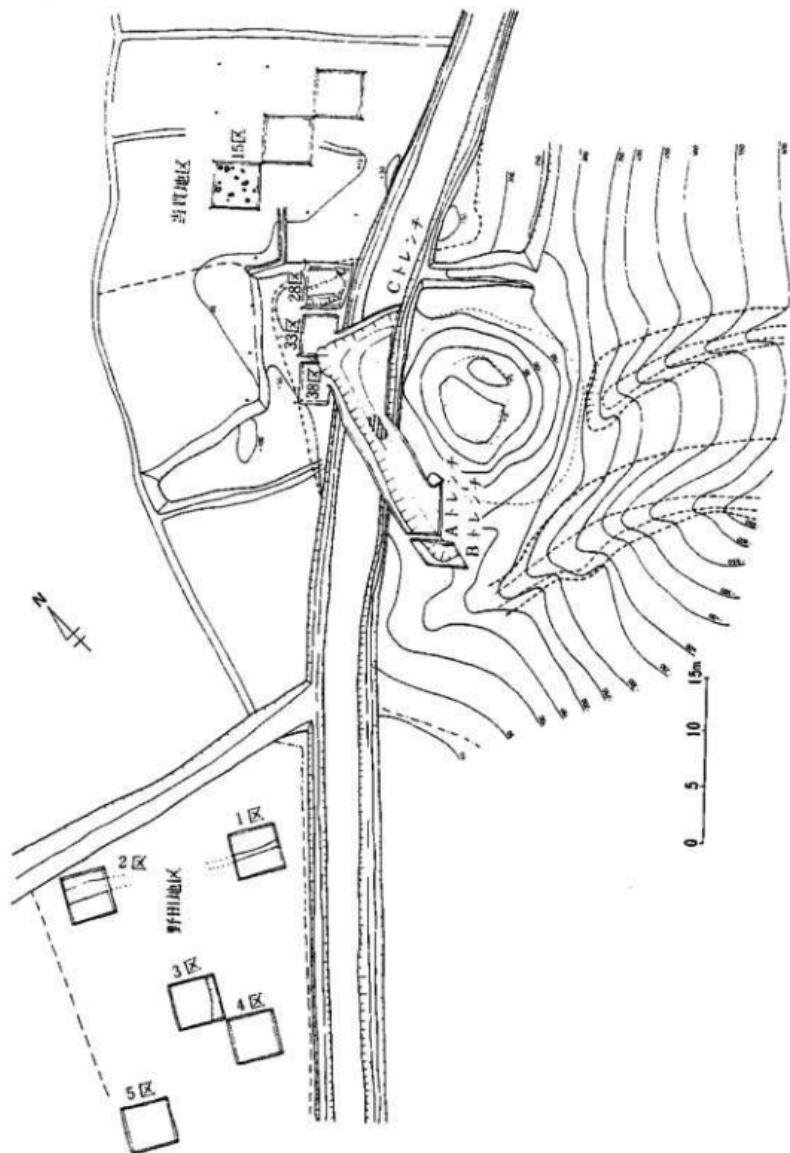
Cトレンチでは、周濠はまっすぐ市道の下を走り、対岸の山林に続いている。この部分では、市道によって後世上部が削平されているので、濠は下部がわずかに遺存していたに過ぎない。市道直下での濠の現存上端幅は1m、下端幅は1.7m、深さは28cmほどを測る。

市道の下を走る濠は、対岸の山林に設定したグリッドの一部で直角に屈折し、再び市道の下をくぐり、古墳の北側に向けて一直線に走っている。

このことから周濠の屈折部が2ヵ所あり、その内側下端すなわち墳裾での一辺は18mあることが確認された。そして、濠の横幅は、市道部分では削平され不明確であるが、古墳の南側で確認したところ、上端幅4.16m、下端幅0.86m、深さ96cmの比較的大規模な周濠であることが分かった。また、周濠の底部のレベルは、水平ではなく西側に向けて高くなる傾向がある。すなわち、東の屈折部付近より、西の屈折部の方が50cm高いことが分かっ



第4図 昭和55年度向荒神古墳調査前地形測量図



第5図 昭和55年度向荒神古墳調査成果図

た。このことは本古墳が、現地形から推測して、台地の中央尾根部というよりは、やや東向きの斜面に立地しているにもかかわらず、濠の深さを絶対的に水平とせず、旧地表から相対的に一樣のものとしたためと思われる。

結果としては、排水機能としての性格は後世まで十分に温存されていたと考えられる。それは、後述するように、Aトレンチの濠底に密着して奈良後期から平安期にかけてのものと思われる糸切底の环身の破片が、また、Cトレンチの市道直下の濠底では平底の壺が括発見されたことにより、少なくともその頃までは殆ど周濠に堆積物はなかったと考えられる。

イ. 出土遺物について

1. 壺 推定器高33.6cm、推定口縁径15.6cm、頸部径9.6cm、体部最大径26cm、底部径10.4cmを測る。体部の一輪と口縁端部、底部の大半を欠失している。

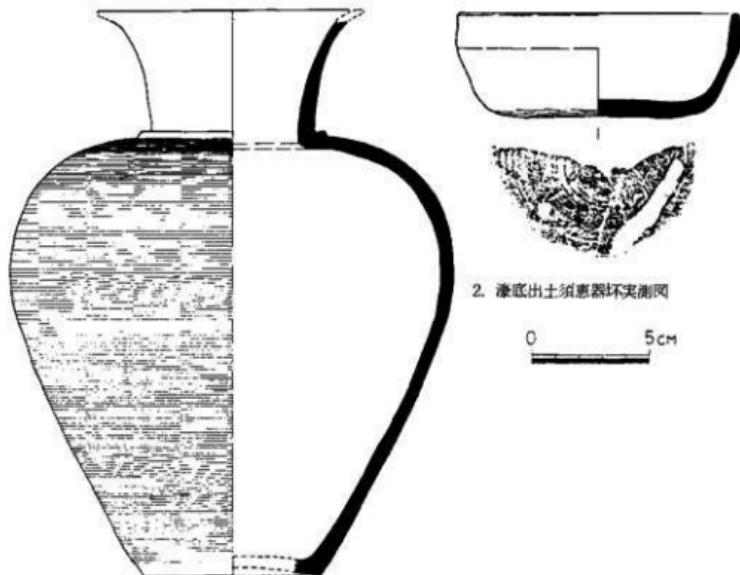
Cトレンチの濠底から出土。2.5m×1mの範囲に集中していた。体部外面は、全体に水平方向のカキ目調整を施している。体部内面はおおまかに横ナデ調整を施し、器内を叩きしめた形跡はない。底部は平底でやや上げ底となる。底外面の調整はナデている。頸部には高さ3mmほどの突帯がまわる。口縁部は外反しその端部は、遺存していないので不明だが、単純口縁もしくは突帯を付けた肥厚口縁が考えられる。この種の須恵器は県内、県外共に類例がなく比較出来ないが、短頸壺の器形の影響を受けており、頸部の突帯と底部は平底である点が特徴である。これらの点からこの須恵器はおおむね9世紀以後の所産になるものと思われる。

2. 坯 器高4.4cm、口縁径12cm、底部径9cmを測る。底部外面に糸切り痕跡を残し、口縁部はほぼ直立する。8世紀後半から9世紀代にかけてのものであろう。Aトレンチの溝底から出土。

3. 壺片 壺の破片に混じって出土。器厚1.1cmほどで外面に平行叩き目、内面に浅い同心円文を付ける。

4. 壺片 厚み0.8cmの壺の小片である。

5. 壺片 厚み1~1.1cmあり、外面は磨耗している。内面は深い同心円文を押圧している。



1. 漆紙出土器実測図

2. 漆底出土須恵器环実測図

0 5CM



3. 漆紙出土器片実測図

0 5CM

第6図 昭和55年度出土遺物

(2) 平成2年度の調査

平成2年度の調査は、対象を墳丘全体とし、上層観察用畦を東西南北にあわせて設定し、地山まで掘り下げた。

ア. 墳丘について

調査の結果、墳丘裾北東部、南東部分は盛土の流出が著しい。しかし南西部部分は築造当初の姿をよく残すものと思われ、南北方向の墳裾ラインは南西隅ではほぼ直角に屈折して直線的にのびる東西方向南辺の墳裾ラインへとつながる。この墳裾ラインは南北方向東辺では不明瞭であるが、東西方向北辺で直線的なラインが確認されており、南辺と北辺ではほぼ平行に走る。この間隔は15mである。

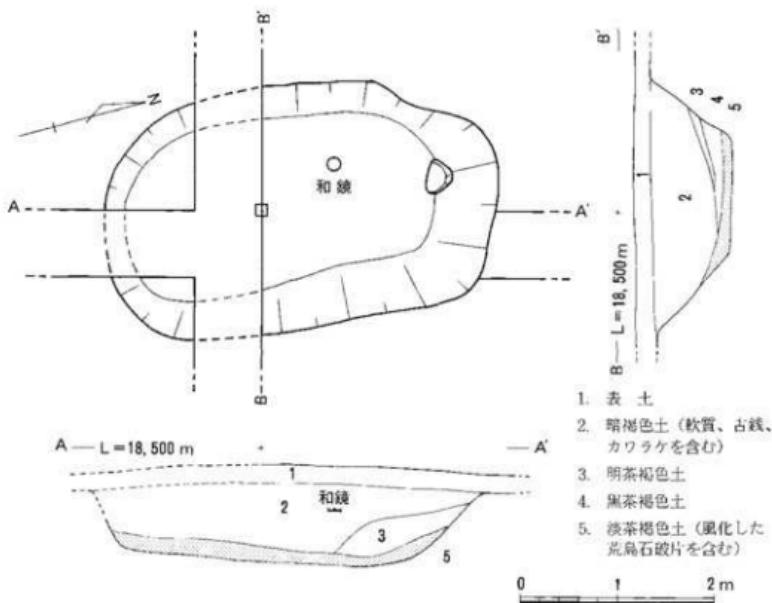
墳丘の築造方法は、旧地表面からまず周濠を掘り、一辺15mの正方形の墳丘基盤を形成し、旧地表上に盛土を施して整形し、墳頂部に一辺6.5mの平坦部をつくる。最大盛土高は1.5mを測る。盛土は基盤から約50cm上までは黄色粘土ブロックを含んだ淡茶褐色土（第4層）と、暗灰褐色土（第5層）を10cmずつ交互に版築状に盛土するが、それほど硬くつきき固めたような印象はなかった。その上には淡～暗茶褐色土（第1～第3層）を盛土するが、これらの層は地山を思わせるほど硬く固められていた。

イ. 周濠について

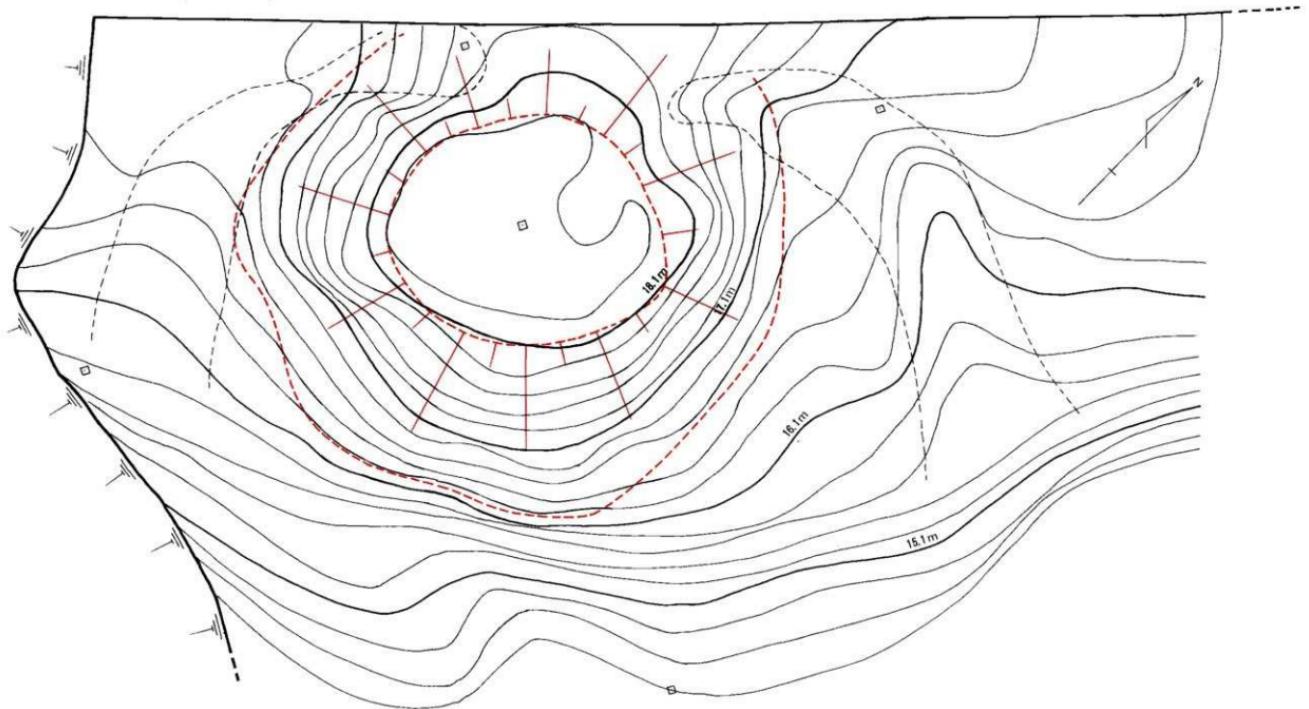
平成2年度の調査では、南辺、北辺、東辺で周濠が検出された。周濠の南西隅の内側のラインはほぼ直角に屈曲しており、本墳が方形であることをよくあらわしているが、北東端、南東端の盛土は著しく流出しているため、周濠はその部分で途切れる。本来は直角のコ・ナ--を持って連続していたものと推定される。残存する周濠は南辺部分でよく残っており、最大幅1.8m、最大深40cmを測る。この周濠内側上端部付近からは浮いた状態で7世紀代の須恵器壺（No.6, 7）と低脚高杯（No.5）が検出されたが、原位置を保つものではなく、墳丘上方からの流れ込みと考えられる。東辺の周濠はあまり原位置を保っておらず、不整形状を呈している。最大幅は3m、最大深は20cmである。周濠内出土遺物はなかった。北辺の周濠は外側が後世の溝によって切られ、幅は不明であるが、内側のラインは一直線状に残っている。最大深は20cmである。この周濠底部に密着して擬宝珠状のつまみをつけた7世紀の須恵器の蓋が2個体（No.1, 2）検出され、いずれもつまみを上に向けて置かれていた。

ウ. 主体部について

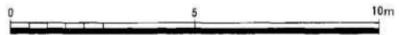
墳丘中心部からは主軸をほぼ南北に合わせた4.0×2.5mの略長方形の上塙が検出された。しかし後世に盗掘を受けたものと見られ、内部には軟らかい暗褐色の土が充满しており、堆積土中に中世以降のカワラケ、古銭が多量に含まれていた。また、直刀もしくは短刀と見られる鉄器1、鎌倉時代の和鏡も1面検出された。この土壙底には風化した荒島石の岩石破片が厚さ約15cmで一面に堆積しており、岩石片の中には人为的に加工された面を持つ破片も含まれるため、築造当初はこの荒島石を使った石棺、または石壺状のものが埋納されていたものと推定される。

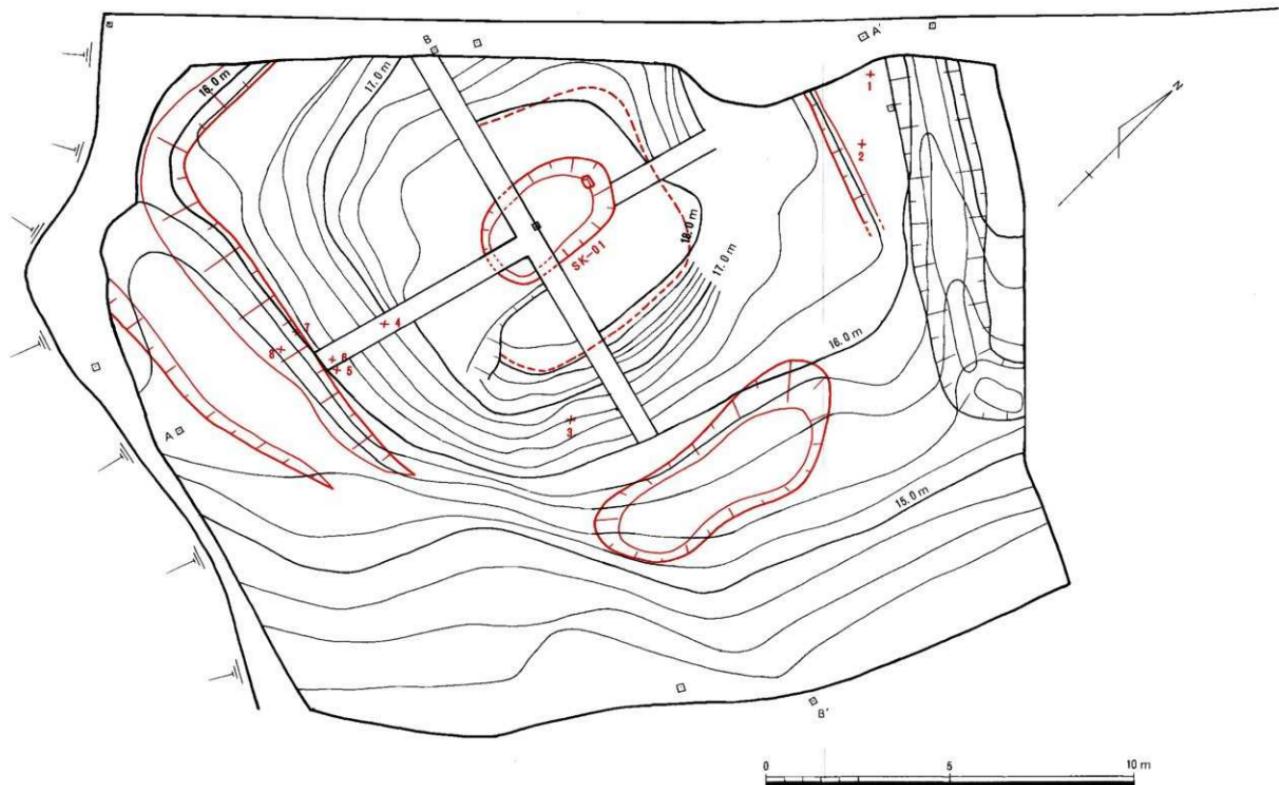


第7図 SK-01遺構図



第8図 平成2年度向荒神古墳調査前填丘測量図

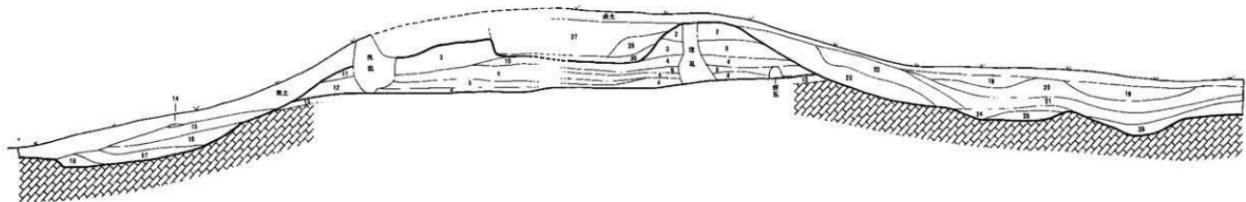




第9図 平成2年度向荒神古墳調査後測量図

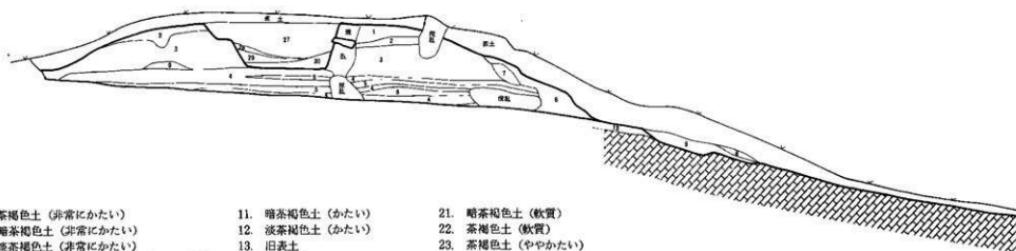
A — L = 18,500 m

— A'

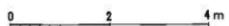


B — L = 18,500 m

— B'



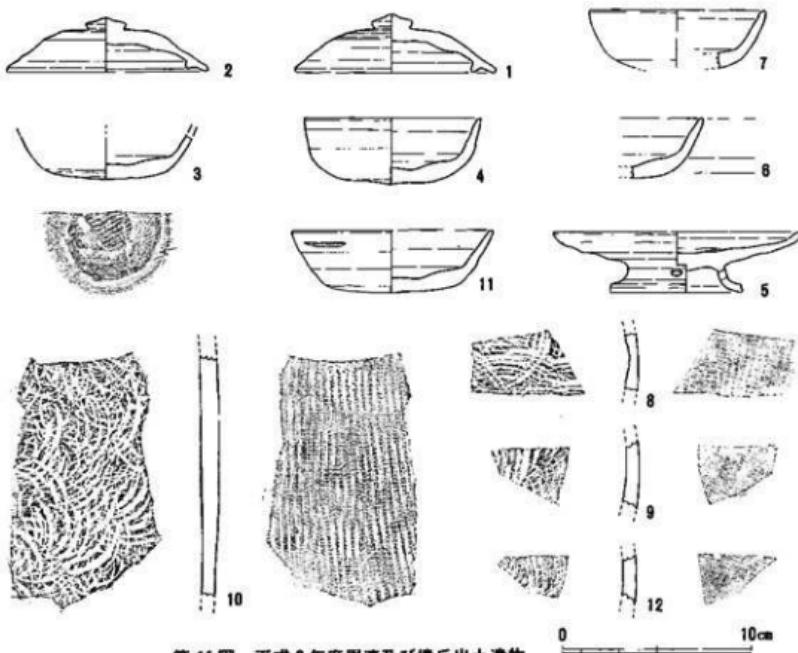
- | | | |
|-------------------|---------------------|--------------------------|
| 1. 茶褐色土 (非常にかたい) | 11. 暗茶褐色土 (かたい) | 21. 暗茶褐色土 (軟質) |
| 2. 暗茶褐色土 (非常にかたい) | 12. 淡茶褐色土 (かたい) | 22. 茶褐色土 (軟質) |
| 3. 淡茶褐色土 (非常にかたい) | 13. 旧表土 | 23. 茶褐色土 (ややかたい) |
| 4. 淡茶褐色土 (軟質) | 14. 黒褐色土 | 24. 茶褐色土 |
| 5. 暗灰褐色土 (やや粘質) | 15. 茶褐色土 (軟質) | 25. 淡黑褐色土 |
| 6. 暗木褐色土 (軟質) | 16. 淡黑褐色土 | 26. 淡茶褐色土 (粘質) |
| 7. 紫灰色土 | 17. 黑褐色土 | 27. 暗褐色土 (軟質、古鉄、カワラケを含む) |
| 8. 淡紫灰色土 | 18. 晴黃褐色土 | 28. 明茶褐色土 |
| 9. 黑灰色土 | 19. 真砂土 | 29. 晴茶褐色土 (かたい) |
| 10. 淡黄褐色土 (かたい) | 20. 黄色粘土 (白色ブロック含む) | 30. 淡茶褐色土 (風化した東島石破片を含む) |



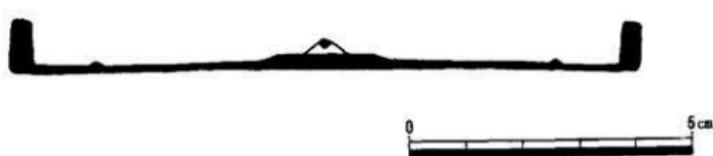
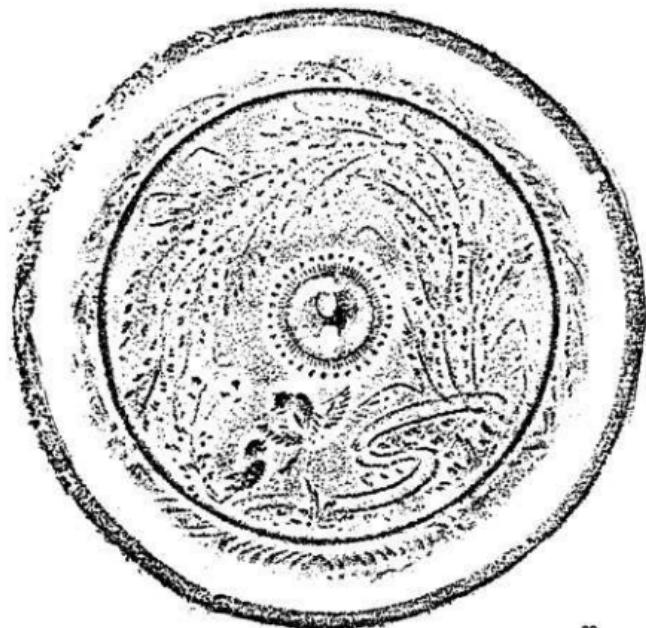
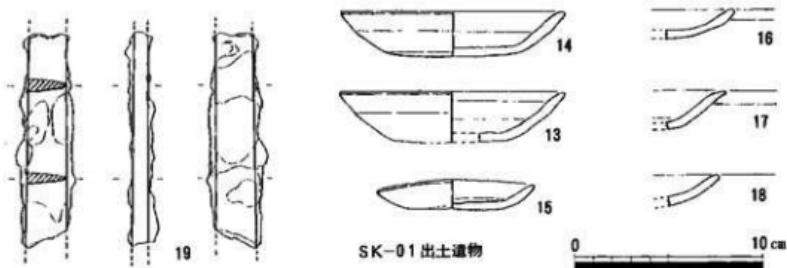
第10図 填丘断面図

エ. 出土遺物について

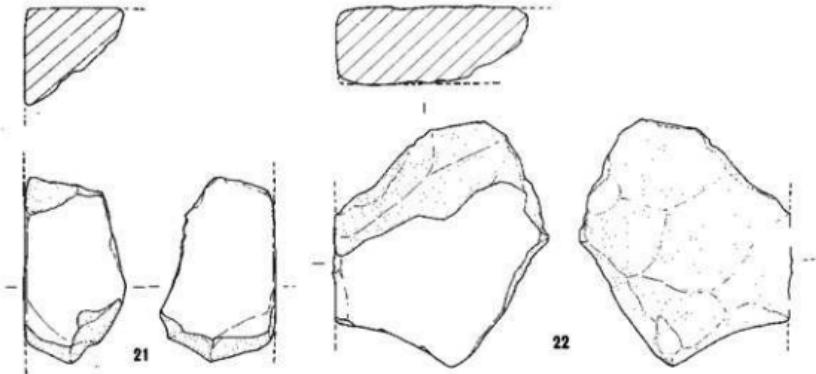
- 北辺の周濠底に密着し、つまみを上にした状態で出土した須恵器の蓋である。口径8.2cm、器高3.1cmを測る。天井部に擬宝珠状のつまみを付ける。天井部外面は回転ヘラケズリの後ナデで仕上げており、やや肥厚気味の天井部からなだらかに口縁部に至り、端部とほぼ同じ高さのかえりを付ける。7世紀中頃のものと考えられる。
- No.1と同じく北辺の周濠底に密着した状態で出土した須恵器の蓋である。口径10.5cm、器高2.8cmを測る。天井部に擬宝珠状のつまみを付ける。天井部外面は回転ヘラケズリの後にナデで仕上げており、やや肥厚気味の天井部からなだらかに口縁部に至り、端部より短いかえりを付ける。7世紀中頃のものと思われる。
- No.2と同じ位置から出土した須恵器の坏身片である。口縁部を欠損しているが、肥厚気味の底部から上外方に直線的にのびて口縁部にいたるものであると考えられる。坏身片外面はヘラ切り後ナデで調整し、一部ハケ日状の痕跡が認められる。7世紀中頃のものであると考えられ、No.2の蓋杯とセットをなすものである。



第11図 平成2年度周濠及び墳丘出土遺物



第 12 図 SK-01 出土和鏡



22

21

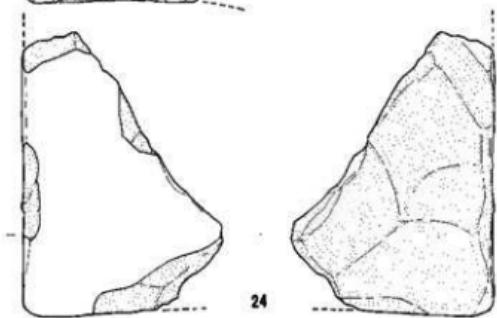
23

24

第13図 SK-01出土荒鳥石

0

10 cm



4. 南辺の周濠内側瀬部分から出土した須恵器の坏身である。口径9.2cm、器高3.5cmを測る。やや肥厚気味の底部から上外方にのび、口縁部にいたる。端部はまるくおさめる。底部外面はヘラ切り後ナデで調整する。7世紀中頃のものであると考えられる。
5. 南辺の周濠埋土中と墳裾部分から出土した土器片が接合したもので、須恵器の低脚の高坏である。口径13.0cm、器高3.2cm、底径7.0cmを測る。坏部は浅く大きく開いて口縁部にいたり、端部付近で屈曲して斜上方に立ち上がる。端部はまるくおさめる。脚部は大きく外弯して短く開く。端部は平坦におさめる。脚部には3方から円形の透かし穴を穿つ。
6. 墳裾南側から出土した須恵器の坏片である。口径、器高は共に不明である。やや肥厚気味の底部からゆるやかに立ち上がり直線的に口縁部にいたる。端部はまるくおさめる。7世紀中頃のものと考えられる。
7. №6と近い位置から出土した須恵器の坏片である。口径は推定9.2cmである。形態については№6とはほぼ同じで7世紀中頃のものであると考えられる。
8. 南側の墳丘中腹部の堆積土中から出土した須恵器の壺甌類の破片である。器厚は最大7mmを測る。外面に格子状タタキ痕、内面に同心円状當て具痕が残る。
9. №8と同位置から出土した須恵器の壺甌類の破片である。器厚は最大8mmを測る。外面に回転カキ目痕、内面に同心円状當て具痕が残る。
10. 東側の墳丘中腹部の堆積土掘削中に出土した須恵器の壺甌類の破片である。器厚は最大1.0cmを測る。外面に格子状タタキ痕、内面に同心円状當て具痕が残る。
11. 墳丘掘削時に表土下から出土した須恵器の坏身破片である。推定口径10.4cm、器高3.3cmを測る。やや肥厚気味の底部からゆるやかに立ち上がり、直線的に口縁部にいたる。端部はまるくおさめる。底部外面はヘラ切り後ナデで調整しており、7世紀中頃のものであると考えられる。
12. 墳丘表土掘削中に出土した須恵器の壺甌類の破片である。器厚は最大8mmを測る。外面に回転カキ目、内面に同心円状當て具痕が残る。
13. 主体部中から出土したカワラケの破片である。推定口径12.0cm、器高2.7cmを測る。平坦な底部から立ち上がり、やや内弯気味に開きながら口縁部にいたる。端部はまるくおさめる。調整は風化が著しく不明である。
14. 主体部中から出土したカワラケである。口径12.0cm、器高2.4cmを測る。平坦な底部から立ち上がりやや内弯気味に開きながら口縁部にいたる。端部はまるくおさめる。調整は風化が著しく不明である。
15. 主体部内堆積土中から出土した小型のカワラケである。やや焼き歪みがあるが、口径8.3

cm、器高1.6cmを測る。平坦な底部からゆるやかに立ち上がり、内窓気味に開きながら口縁部にいたる。端部はまるくおさめる。

16. 主体部堆積土中から出土したカワラケの破片である。口径、器高はともに不明である。平坦な底部からゆるやかに立ち上がり、内窓気味に短く開いて口縁部にいたる。端部はまるくおさめる。

17. 上体部内堆積土中から出土したカワラケの破片である。口径、器高はともに不明である。口縁部はゆるやかに立ち上がり、内窓気味にのびたのち、口縁部で外反する。

18. 墳丘表土掘削中に出土したカワラケの破片である。口径、器高はともに不明である。口縁部は内窓気味に短くのびて口縁部にいたる。端部はまるくおさめる。

19. 上体部内堆積土中から出土した鉄製品で直刀または短刀の破片である。残存長11.5cm、刃幅2.2cmを測る。

20. 上体部内堆積土中から出土した秋草双鳥鏡である。鏡面を下に向かた状態で出土した。面径11.2cm、縁高0.9cm、直角式中縁をもつ。菊座鏡を中心として取り囲むように萩が描かれ、鋏の下方に雀が2羽配されている。界隈は一重圓で細く低い。

21. 上体部底に堆積していた荒島石の破片である。直角に屈曲した角を残す。

22. 主体部底に堆積していた荒島石の破片である。平坦な石材で厚さは4cmを測る。

23. 上体部底に堆積していた荒島石の破片である。ゆるやかなカーブを持ち、厚さは4cmを測る。

24. 主体部底に堆積していた荒島石の破片である。ゆるやかなカーブを持ち、厚さは4cmを測る。

4. 出土遺物の検討

(1) 古銭について

上体部上面及び主体部埋土中からは、かわらけ皿に混じって多量の古銭が検出された。古銭は総数162枚で、うち銭名の判別できるものは131枚で、26種類に及ぶ。初鑄年の最も古いものは唐の「開通元宝」、最も新しいものは「朝鮮通宝」である。このうち最も多いのが「寛永通宝」の52枚であり、次に大きな比率を占めるのが北宋銭の41枚である。

これらの中で鋳化のため癒着した状態で出土したため、一括埋納されたと判断される古

銭が2例（A, B）ある。Aは21枚連結しており、「開通元宝」～「朝鮮通宝」、Bは「開通元宝」～「元豊通宝」である。Aの古銭の孔の中には炭化した繊維質が残っており、当初は紐で連結されていたものと推定されるが、その年代幅の広さは注目に値するところである。

これらの古銭はいずれも後世に主体部が攪乱された後、「荒神さん」として祀られるようになってから供えられたものと考えられるが、全体の1/3を江戸時代の寛永通宝が占め、もう一方で北宋銭が1/3を占めている。従って数量的に見れば、10世紀～11世紀代と江戸時代の二度のピークがあったと考えられる。

SK-01 出土銭一覧

銭貨名	初鋳年	枚数	銭貨名	初鋳年	枚数
開通元宝	唐 621	5	元符通宝	北宋 1098	2
淳化元宝	北宋 990	1	聖宋元宝	北宋 1101	6
至道元宝	北宋 995	1	大觀通宝	北宋 1107	2
景德元宝	北宋 1004	2	政和通宝	北宋 1117	2
天禧通宝	北宋 1017	1	宣和通宝	北宋 1119	1
天聖元宝	北宋 1023	2	嘉定通宝	南宋 1208	1
明道元宝	北宋 1032	2	至大通宝	元 1310	1
皇宋通宝	北宋 1039	4	洪武通宝	明 1368	12
至和元宝	北宋 1054	1	永樂通宝	明 1408	13
熙寧元宝	北宋 1068	3	宣德通宝	明 1426	1
元豐通宝	北宋 1078	5	寛永通宝	江戸	52
大祐通宝	北宋 1086	4	朝鮮通宝		3
紹聖元宝	北宋 1094	4	判読不明		31
合計					162

(2) 和鏡について

日本に鏡が初めてたらされたのは弥生時代前末頃、朝鮮半島から舶來したものと考えられている。中国においては鏡は基本的に化粧道具であったが、国内においては弥生時代中期以降に後漢鏡が多量にもたらされ、舶載鏡を模した仿製鏡も多く作られるが、刀、剣とともに主長の主權の象徴、祭祀の呪具として用いられ、墳墓に副葬された。この思想は古墳時代にも続くが、古墳時代も後期に入ると古墳の副葬品は武具、馬具が主流となり、鏡の重要性は薄れてゆく。

飛鳥、奈良時代に入ると仏教文化とともに唐鏡がもたらされる。国内においてもこれらの鏡を模して蠍形鑄造した唐式鏡や、唐鏡を踏み返した製作の容易な踏返鏡が作られ全国に普及するが、除魔用として舍利容器と共に塔に納置されたり、修法祈禱、仏像や室内の社殿に用いられるようになった。しかし鏡背文様は依然として中国の模倣に留まるものであった。

平安時代に入って遣唐使が廃止され、唐からの文物の流入が途絶えた頃から次第にわが国独特の文様要素が目立つようになる。製作技法においても軟らかい鋳造用の土（真土）の上に直接ヘラで文様を描くようになり、しだいに唐様からはなれて和様化する。文様は「松」「菊」「鶴」「雀」といった“花鳥”的意匠へと移行し、繊細でいきいきとした表現ができるようになった。また、鏡は末法思想の高まりとともに經塚に埋納されたり、化粧道具としても使われるようになったため、全国に急速に普及していった。この頃からの國產鏡を「和鏡」と総称する。この和鏡は平安時代後期に成立し、鎌倉時代に技巧的に確立期を迎える。室町時代には柄鏡も出現し、江戸時代へと続く。

鳥根県内においては現在39ヶ所、44面が確認されている。特に出土鏡を中心とした把握しかできなかったが、社寺に奉納された鏡を加えるとかなりの数にのぼるものと思われる。出土鏡について見ると、經塚、古墓に埋納された例が多く、平安～室町時代の和鏡が出土している。その他の出土例では、修法壇や池、また、松江市下黒田遺跡SK-01出土の場合のように備前焼の壺の中にかわらけ、占銭、モミガタ、人毛と共に納められた例など祭祀遺構からの出土も見られる。これらは室町時代を中心とした例が多いように見受けられる。本墳出土の和鏡は「秋草双鳥鏡」であり、その形態から鎌倉時代のものと推定され、「荒神さんへの供獻物であると考えられるが、鏡面右方に径5mmの孔が1ヶ所穿たれており、本来は社寺に奉納されたか、掛鏡として祭礼用に使われたものではないかと考えられる。

5. 小 結

昭和55年度、平成2年度の発掘調査の結果、本墳は四周に周濠を巡らし、土軸を南北方向にとる方墳であることがわかった。墳丘の規模は墳頂部分で一辺15m、最大盛土高1.5mを測り、盛土下部は版築状にていねいに築いている。墳頂部には一辺6.5mの平坦部を持ち、中央部分に長辺を南北にとる4.0×2.5mの略方形の草礎を掘り込む。主体部の調査では、墓壙中からは軟らかい流入土に混じって本墳とは直接関係がないと思われる古鏡、かわらけ、和鏡が検出されたため、本墳の墓壙は後世に盗掘などによる攪乱を受けた後、「荒神さん」として祀られるようになり、これらの遺物が供えられたものと考えられる。ただし、この墓壙底には荒島石の破片が厚さ約15cmで一面に堆積しており、本来はこの石材を使った石棺などが埋納されていたものと推定される。

本墳の築造年代については、南辺および北辺の周濠中から出土した須恵器を手がかりとせざるを得ないが、いずれも7世紀中頃のものであり、昭和55年の調査では平安時代にまで下ると思われる須恵器も出土している。これを以て築造年代にあてはめるのは薄葬令がしかれた当時の時代背景から考えると疑問が残る。松江市内の古墳の例を見ると、周濠中および墳頂から古墳築造年代とはおよそ合致しない年代の須恵器が出上する例が竹矢町^(注4) 中竹矢後1号墳、坂本町細曾1号墳などに見られ、古墳築造後時期を経て須恵器を供える祭祀があったらしいことが指摘されているため、本墳についても同じことが考えられる。よって築造年代は断定できないが、本墳の墳丘規模等から考えると古墳時代中期頃までさかのばるものと推定するのが妥当であると考えられる。

いずれにせよ、乃木地区では最大級の方墳であり、古墳群を形成せずに独立して存在することから見ると、当地域で相当な勢力を有した豪族により築造されたことは間違いないものと思われる。

註1. 松江市教育委員会「野田遺跡・向荒神古墳」1981年

2. 石材の鑑定は国立島根大学教育学部教授三浦清氏に御教示いただいた。

3. 和鏡の鑑定は大阪市立博物館学芸員前出洋子氏に御教示いただいた。

4. 松江市教育委員会「中竹矢後1号墳 長峯遺跡」1986年

5. 松江市教育委員会「細曾1号墳」1987年

鳥根県内和鏡一一編

編 種 別	遺 跡 名	所 在 地	遺 構 ・機 要	遺 物 ・機 要	備 考・文 獻 名
1	宮島神社跡	安来市利弘町前谷	詳細不明	「保元元年丙子十二月」の銘をもつ灰下では最古の 瓦頭鏡の表面に馬頭瓦頭を残止めにし、表面 に文字を鋲出する。(平安) 面径20.5cm、厚さ1mm	鳥根県大百科事典 宮島神社所蔵
2	祖父谷遺跡	広瀬町祖父谷	詳細不明	「長生鏡」1面 径10.8cm、総高1cm(直錐式)、厚さ3.5mm、重さ315 g、茎、輪、輪形部に輪形部で二重圓 枝貧3枚、北京枝が太平	
3	鏡出土地	柏太町安田宮内	詳細不明	詳細不明	
4 古 滝	向葉神古墳	松江市上乃木町	一足15.5cmの方鏡 塗墨された主体部埋土中央 から出土	「牧草双魚鏡」1面(複合) 面径11.3cm、総高0.9cm、重さ180g 扇形盤、扇形式中垂 輪形部を中心として取り留むように車が描かれて、車の 下方に車が2列配されている。	鳥根県埋蔵文化財報告書第3集 昭和6年
5 古 畠	松山1号墳	松江市上乃木町		「船纹双魚鏡」1面(複合?) 面径11.3cm、総高7mm、魚形盤を中心として外区の上 下に舟形を配し上方の引羽は長枝をくわえる。 舟の部分に魚形のつまみがつけられ、二次的に使用さ れた可能性がある。	鳥根県埋蔵文化財報告書第3集 昭和6年
6 古 畠	松山16号墳	松江市上乃木町	2.0×2.0m円形 墳土はほとんどなく内部構 造は不明	「鬼甲地方鏡」1面(複合?) 面径10.7cm、総高7mm、鬼形盤の上方に飛び立ち二男 の姿を配し、外区には炎管一束によつて分けるは か、一面に三重ある鬼甲を配している。 法螺貝殻欠1、刀身1、附片1、	鳥根県埋蔵文化財報告書第3集 昭和6年
7 銀河遺跡	下黒田遺跡	松江市大庭町下黒田		「鶴田銀鏡」1面(複合) 面径9.8cm、総高0.9cm、重さ175g 鏡形の土壇に鏡頭地の豪 華な位置に置き、その中にわ らかけ16以上、和鏡1、古 鏡23、モミガラ、人毛を入	

8	古 烏	的場遺跡	松江市本庄町	れる 170cm×75cm×10cmの長方 形中世墓中から出土	「菊花紋双鳥鏡」1面 面径10.7cm、縁高0.7cm、厚さ1.0mm、重さ80g 素鉄、一重鏡、直角式中継 同安窯系青磁輪×1、口径15.6cm、器高6.9cm、内面 に草花文、外面にクシ状工具による文様 かわらけ、辰打
9	鏡出土地	熊野遺跡	八雲村熊野	詳細不明	双鏡鏡
10	新宮神社後	玉湯町		詳細不明	和鏡
11	須川井遺跡	奥川井金穴	大東町下佐世	消滅	和鏡、土師質土器
12	経 塚	刈山経塚	大東町下佐世	8.5×7.5m、高さ1.5mの 円形古墳。頂部に須賀大 臺を覆いて盛土し、その上 に前方の範囲に方墳を敷 き詰める	「流沫雙鳥鏡」1面（平安後期） 直角式中継、面径1.8cm、花形低座盤 「淡水雙花双鳥鏡」1面
13	経 塚	能ノ田経塚 (津原経塚)	加茂町神原、三代境	一辺約四方の経塚から出 土、壇の口を擴で盛て置する	瀬形鏡「瀬州真石金二程照子」嵌り1面 文元六年賀文鏡で素版、面径1.8cm、縁高0.8cm、厚さ0.3 cm、重さ165g (中国宋朝代) 四耳鏡 口径11.2cm、器高30.3cm、剖面最大径24.8cm
14	祭祀遺跡	大蛇子遺跡	加茂町砂子原	室町期の祭祀遺 高く両に張り出す修法壇、 マウンド上より石碑、和陶 古墳、瓦器等出土	「斯體双双鳥鏡」
15	祭祀遺跡	布須神社和 屬出土地	加茂町宮ノ谷	神社下方の祭祀地より和鏡 出土	「數葉双鳥鏡」1面（室町期） 面径9.1cm、縁高1cm、厚さ0.2mm、重さ160g 鶴形鏡、二重鏡、直角式中継
16	鏡出土地	松賀和鏡出	加茂町黒谷	猪尾元宮地の東に對峙する 丘陵地にあり、荒神を祀る	「數葉双鳥鏡」1面（室町期）

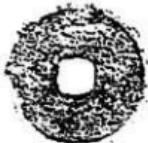
17	既出土地 相模原和輪 出土地	加茂町相保選	付近から偶然出土。 付近に地名「荒神谷」あり。	「洲浜菊瓦金輪」1面（室町期？） 面径0.7cm、厚さ0.4cm 扇形皿、二重圓、直角式中縫	加茂町の遺跡 平成3年度 大原郡馬土資料第2集 昭和30年
18	既出土地 和輪出 土地	加茂町深田	舌状低丘陵端から出土と伝 う。	「繩文瓦金輪」1面（室町期？） 面径10.1cm、厚さ0.2cm、重さ180g 扇形皿、二重圓、直角式中縫	加茂町の遺跡 平成3年度 大原郡馬土資料第2集 昭和30年
19	神奈神社		詳細不明	「菊紋文瓦金輪」1面（室町期？） 面径9.3cm、厚さ0.3cm、重さ130g 二重圓、直角式中縫	加茂町の遺跡 平成3年度 大原郡馬土資料第2集 昭和30年
20	光明寺		詳細不明	「菊紋文瓦金輪」1面	加茂町の遺跡 平成3年度
21		加茂町大竹裏原	詳細不明	「松双鶴輪」（鎌倉？）1面（平安末） 面径11.5cm、厚さ0.3cm、重さ0.4kg 扇形皿、一重圓、直角式中縫	大原郡馬土資料第2集 昭和30年
22	貴船神社	加茂町南加茂	詳細不明	「鏡名不明」1面、松と蜜を配する 面径11.2cm、厚さ0.2cm、重さ170g 一重圓、直角式中縫	大原郡馬土資料第2集 貴船神社蔵
23	祭祀遺跡 大森遺跡	木次町日野大森	詳細不明	和鏡、刀等	
24	古 墓	茱萸山古墓 三刀屋町六葉通美256-3	中世の修法跡か？	銘題？蓋片？ 石碑、古鏡、刀子、土師質土器（皿）	三刀屋町の遺跡 II 平成元年度
25	横 穴	森谷横穴1号 三刀屋町森谷	横穴墓から出土	菊紋文の丸鏡（鎌倉～室町？）	三刀屋町の遺跡 II 平成元年度
26	既出土地 清水荒神塚 遺跡	三刀屋町森河内上森河内	正福寺跡から東へ約300m 急勾配な丘陵の頂間に位置す る。堅柿窯2穴	和鏡、銅鏡、刀、土師質土器、円盤	三刀屋町の遺跡 III 平成2年度

27	輸出土地	上谷貳遺跡	三刀屋町里坊塚上	詳細不明	和鏡出土の伝承あり
28	城	上山城跡	吉田村上山	山城	「菊花及御鏡」、古鏡 宋鏡
29	古	城	姫津辻古墳	平田市万田町 円墳、組合せ石棺の棺外出 土	和鏡、小菊花浮文を施す 宋鏡
30	輸出土地	地番遺跡	平田市益浦	詳細不明	「鬼斑柄瓦蓋鏡」、「鶴鹿紋瓦蓋鏡」 「鬼斑柄瓦蓋鏡」、「室野原」
31	古	墓	立石遺跡	平田市小堺町北垣上立石	小形鏡、土器質土器、古鏡
32	輸出土地	野瀬寺跡	平田市野瀬寺	石製鍵開とともに出土	滑川鏡「八葉鏡」1面、直径13.3cm 銘背に「滑川真正石」1面、「元熙子」銘あり 滑川鏡「素文円鏡」1面、直径12.8cm 銘面に僧仁光が宿王室賀に平二年[1152]庚申六月十 日酉免に贈入し奉つたとの計書跡がある
33	古	墓	管原寺古墳	大社町杵築西下大土地 酒藏	和鏡、人骨、古鏡
34	古	墓	管原寺古墳	大社町管浦	安部某社の祠の下から短 刀の人入った大量と多數の古 鏡、和鏡2面が出土した。
35	経	塔	寺ノ墓經塔	西ノ島町美田向	滑川鏡18面の高田山中腹で 高115mの尾根の先端に立 始する。東西13.2m、南北 7.4m、高さ55cmの石積み 施設。12c代
36	輸出土地	宮ノ前遺跡	西ノ島町美田	洋鏡不明	「海螺貝鏡」1面、銘背 径10cm、総高5.5cm、重さ120g花蓋鏡で一重 「草花及御鏡」1面（平安） 「海螺貝鏡」1面（平安） 「柳乳鳥鏡」1面（平安）約110g 後元径9.5cm、総高5cm、到達鏡で一重 阮輪四耳鏡1（越州窯系）、青白磁小壺1、金銀鑄 1、鉢1、宣和通宝1、土器器片1、かわらけ皿片 1、瓶片數十片、小刀残欠、鏡片數片 和鏡

37	散布地 社ノ谷遺跡	匹見町祇福三郷	詳細不明	開闢(平安)
38	寺院跡 興源寺跡	津和野町後田中の原	詳細不明	小城、香炉



A-1. 政□通宝



A-6. 元□通宝



A-2. 皇宋通宝(北宋1039)



A-7. 紹聖元宝(北宋1094)



A-3. 紹聖元宝(北宋1094)



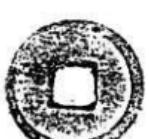
A-8. □□□寶



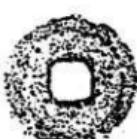
A-4. 開寧元宝(北宋1068)



A-9. 開通元宝(唐 621)



A-5. 聖宋元宝(北宋1101)



A-10. 聖宋元宝(北宋1101)



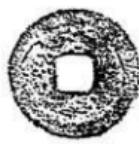
A-11. 永樂通寶(明 1408)



A-16. 熙寧元寶(北宋1068)



A-12. 聖宋元寶(北宋1101)



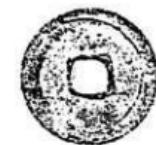
A-17. 永樂通寶(明 1408)



A-13. 至道元寶(北宋 995)



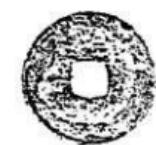
A-18. 景德元寶(北宋1004)



A-14. 元豐通寶(北宋1078)



A-19. 聖宋元寶(北宋1101)



A-15. 政和通寶(北宋1111)



A-20. 聖宋元寶(北宋1101)



A-21. 朝鮮通寶



B-5. □□□宝



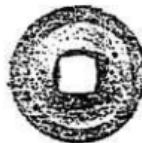
B-1. 元豐通寶(北宋1078)



B-2. 天聖元宝(北宋1023)



B-3. 淳化元宝(北宋 990)



B-4. 開通元寶(唐 621)

SK - 01 出土古錢拓本 (B)



1. 開通元寶(唐 621)



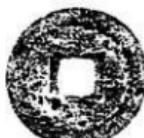
6. 天聖元寶(北宋1023)



2.



7. 明道元寶(北宋1032)



3.



8.



4. 景德元寶(北宋1004)



9. 崇寧通寶(北宋1039)



5. 天禧通寶(北宋1017)



10.





11.



16.



12. 至和元宝(北宋1054)



17. 元祐通宝(北宋1086)



13. 熙寧元宝(北宋1068)



18.



14. 元豐通宝(北宋1078)



19.



15.



20.





21. 趙聖元寶(北宋1094)



26. 大觀通寶(北宋1107)



22.



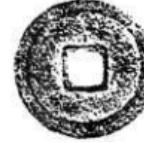
27.



23. 元符通寶(北宋1098)



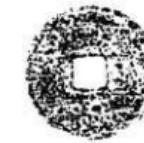
28. 政和通寶(北宋1117)



24.



29. 宣和通寶(北宋1119)



25. 聖宋元寶(北宋1101)



30. 嘉定通寶(南宋1208)



31. 至大通宝(元 1310)



36.



32. 洪武通宝(明 1368)



37.



33.



38.



34.



39.



35.



40.





41.



46.



42.



47.



43.



48.



44. 永樂通寶(明 1408)



49.



45.

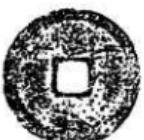


50.





51.



56. 寛永通寶



52.



57.



53.



58.



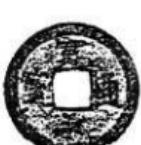
54.



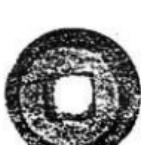
59.



55. 宣德通寶(明 1426)



60.



SK-01 出土古錢拓本



61.



66.



62.



67.



63.



68.



64.



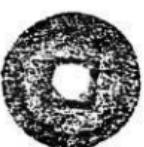
69.



65.



70.





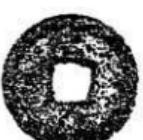
71.



76.



72.



77.



73.



78.



74.



79.



75.



80.





81.



82.



86.



87.



83.



84.



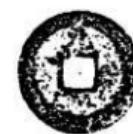
88.



89.



85.



90.





91.



96.



92.



97.



93.



98.



94.



99.



95.



100.



101.



102.



103.



104.



105.



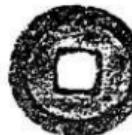
106.



107.



108. 判読不明



109.

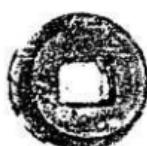


110.





111.



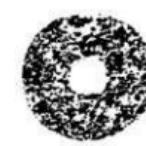
116.



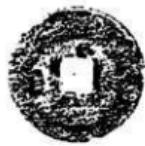
112.



117.



113.



118.



114.



119.



115.



120.



121.



126.



122.



127.



123.



128.



124.



129.



125.



130.



131.



136.



132.



133.



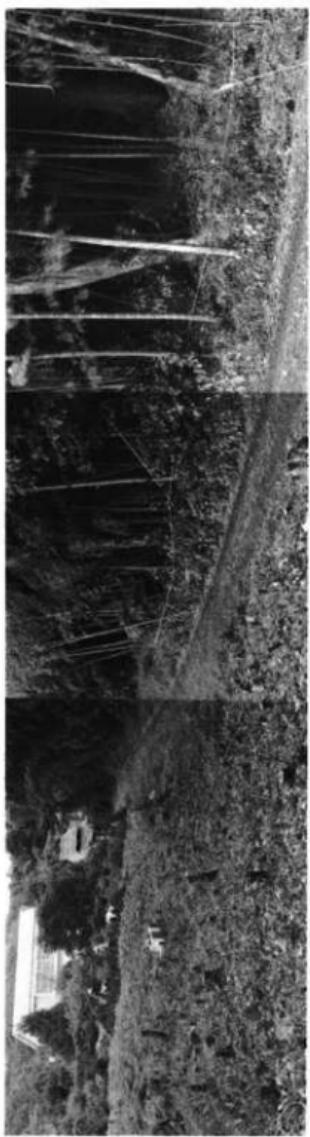
134.



135. 朝鮮通寶



図 版



1. 当真地区全景（石向荒神古墳） 昭和 55 年當時



2. 向荒神古墳周濠
(手前北西角付近)
昭和 55 年



3. 当貫 33 区南東角落込み
(古墳周濠角部)
昭和 55 年

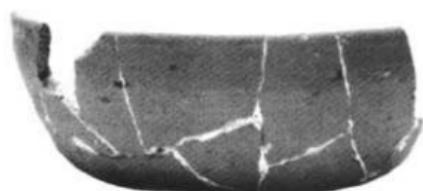


4. 向荒神古墳周濠
北西角付近
昭和 55 年

5. 向荒神南部日トレンチ。
周濠底須恵器坏身出土状况
昭和 55 年



6. 須恵器 壊身



7. 須恵器壺





8. 平成 2 年度
調査前近景 (東方より)



9. 調査前近景 (北方より)

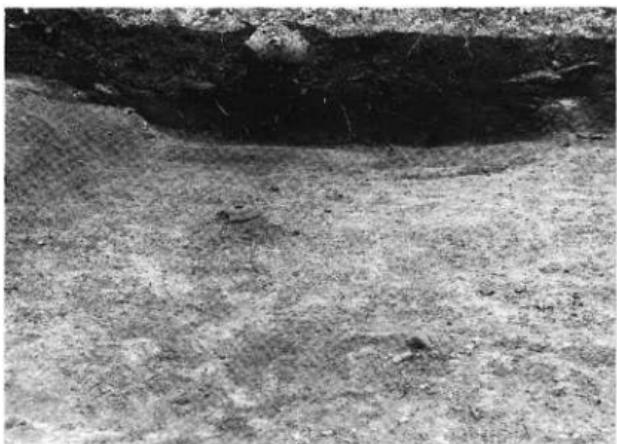


10. 調査前近景 (南方より)

11. 北側周濠検出状況

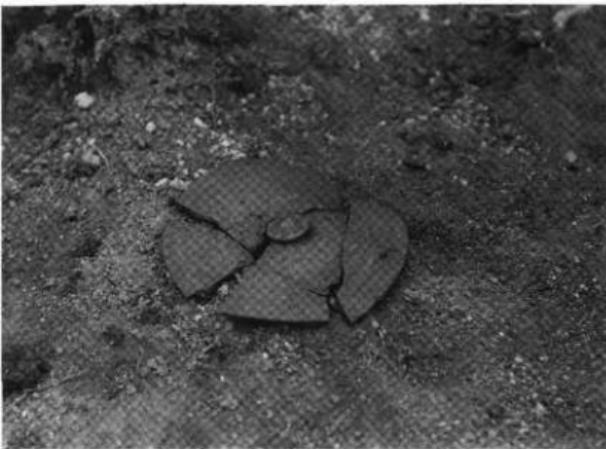


12. 北側周濠中遺物出土状況
(手前No.2、奥No.1)



13. 北側周濠中出土須恵器
No. 2





14. 北側周濠中出土須惠器
No. 1



15. 南側周濠堆積土狀況



16. 南側周濠完掘狀況

P. L. 7

17. SK-01検出状況



18. SK-01中和鏡出土状況



19. SK-01中古鏡A
出土状況





20. SK-01 堆積土状況
(西から)



21. SK-01 堆積土状況
(北から)



22. SK-01 荒島石堆積状況

23. SK-01 荒島石堆積状況
(東から)



24. SK-01 完掘状況
(北から)



25. 向荒神古墳完掘状況
(北から)





26. 向荒神古墳完報状況
(東から)



27. 墓丘南東部盛土除去後



28. 墓丘南東部盛土除去後
(SK-01付近)

29. 填丘東側盛土除去後

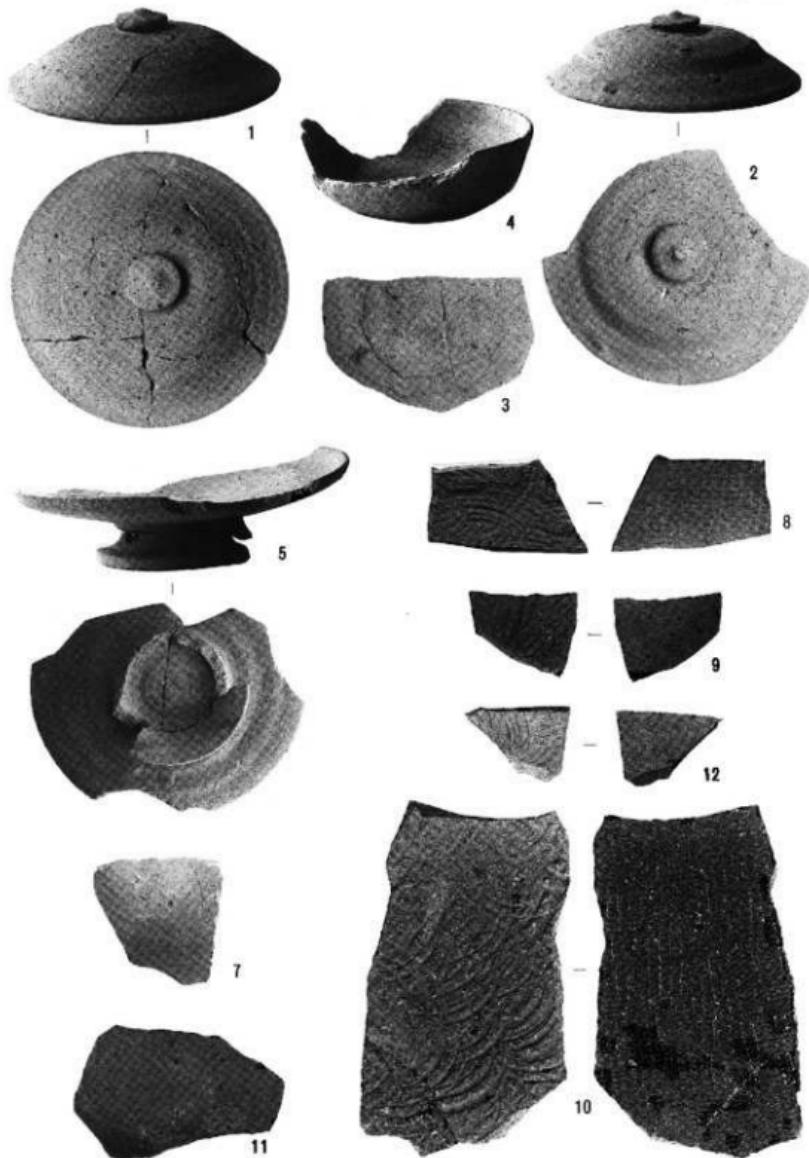


30. 填丘東側盛土除去後
(SK-01付近)



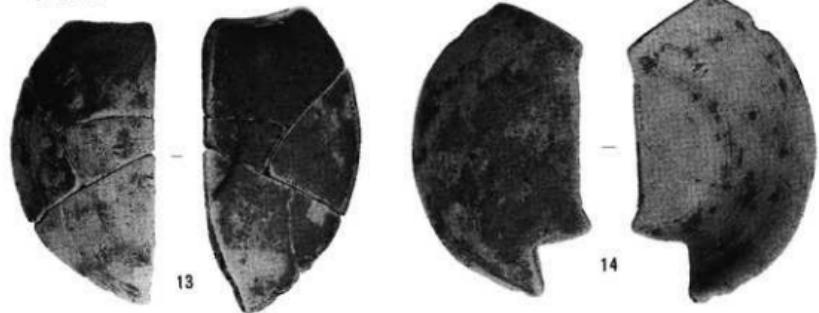
31. 填丘盛土除去後（北から）





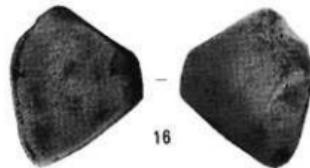
向荒神古墳出土状況

P. L. 13



13

14



16

18



19



17



15



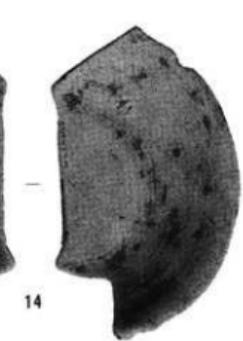
24



23



21

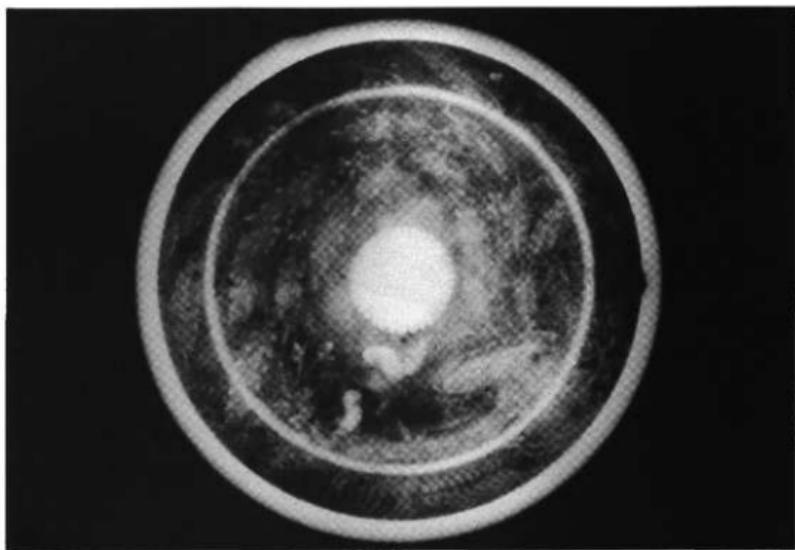


22

向荒神古墳出土遺物



20. SK-01出土秋草双鸟鏡



同上 X線写真

向荒神古墳発掘調査
報告書

1992年3月

発行 松江市教育委員会

印刷 有限会社 谷口印刷
松江市母衣町89